

「文化交流主導型の日韓関係」

在韓国日本国大使館 公報文化院長 西岡 達史

●先生方のご発言、ご提案に基づいて、私なりの個人的な考察を述べる。

●小倉先生、シンガクス大使とともに欧州との対比をされましたが、私も若干違った角度から欧州(ヨーロッパ)を例に取ってみたいと思います。第二次世界大戦後の欧州の統合は、いわば経済主導型で進められてきたと言えるわけですが、経済統合の理念と原動力は平和にありました。経済面での相互依存を深めることで、意図的に相手を自分にとって不可欠な存在にしてきた。相互依存が深まれば、相手国との関係が損なわれてしまった場合、自分に不利益が及ぶ。そういう関係を意図的に作り上げた。これはいってみれば安全保障の究極の姿です。二度の世界大戦を経て、三度目は決して繰り返さないとの決意に基づいた人類の英知の結晶でもあると思います。

●さて振り返って、日韓の関係はどうでしょうか。日韓関係は、EUとは違います。私は、日韓関係は、経済主導型ではなく、文化交流主導型の関係と位置づけることが出来ると考えています。言い換えれば、相互依存よりも相互理解が鍵となる関係となります。その考えを、3つの角度から述べます。

●第1点。日韓共同パートナーシップ宣言から20年ですが、この20年を振り返れば、進展の評価が難しい分野もある。経済面も評価は難しい。しかしながら、誰の目にも進展が明らかなのが、文化交流・人的交流の分野。韓国での日本大衆文化開放や日本での韓流ブームは、十分とはいえないまでも、安定した二国間関係の礎を作った。今後も日韓関係は文化交流が主導していくことが期待されるし、それが必要だとも思うわけです。

●というのも、日韓関係はいつも難しい。ささいな問題が簡単に政治問題化する。せっかく日韓関係が前進する機運があっても、すぐにこわれてしまう。良くも悪くも、国民同士がお互いを強く意識し合っているか

からこそ問題が大きくなるのであり、それが国と国との関係に影響を及ぼすのは、お互いに民主主義国家であるからこそです。これほどまでに国民の感情が国と国との関係に影響を及ぼす二国間関係というのは、他に例がないのではないのでしょうか。お互いに成熟した民主主義国家ですから、この状態はずっと続くと考えなくてはならない。

●したがって、安定した二国間関係は、国民同士の相互理解が基盤にならざるを得ないわけです。偏見や先入観も怖いですが、無関心も怖いです。文化交流、人的交流が果たす役割が大きいのはそのためです。

●第2に、東アジアは激動の時代を迎えています。これまでの冷戦構造の下では、安全保障上の必要性という大きな意義が、日韓関係を強く支えていました。しかし、今後は、それだけではない。もちろん、北朝鮮とのプロセスは始まったばかりで、楽観はできません。しかしながら、それを乗り越えて東アジアが共存と繁栄、平和と発展の時代を迎えることを、誰もが望んでいるわけです。

●日韓両国は、アジアで二つの先進民主主義国家です。過去の経済成長過程や、産業構造や社会構造にも共通点が多く、今後直面する課題も共有。高齢化、社会保障、教育、環境といった様々な面で、今後多くのアジア諸国が直面する課題に、日本と韓国は既に取り組んでいる。

●したがって今後の日韓関係を展望するならば、日韓がお互いに向き合って二国間の間にある問題を解決するだけでなく、日韓が同じ方向を向いてアジアをリードする関係が求められているのではないかと思います。さらにシンガクス大使のおっしゃった、「日韓関係を「東アジアの平和と繁栄の砦」にする」ということの意義はそういうことではないか。逆に、日韓関係を、アジアの不安定要因にしてはならない。アジアの他の地域の人々の中には、実際に日韓関係が今後のアジアの不安定要因になりうると考えている人達があります。

●そのためには、偏見や先入観が相手を見る目を曇らせないように、相手の目を通じて世界を見る機会が当たり前のように日常化されていくこ

とが大事。この点は小倉先生の指摘された通りだと思います。今流行している映画やアニメでも良い。ポップ音楽や飲食物でも良い。芸術や伝統文化やスポーツでも良い。相手国を訪れてその普段の生活に触れてみることもよい。相手国の政治や経済を知るだけでなく、社会を、生活を、人生を知って、相手を身近にし、理解を深めることで、今後東アジアを主導する関係の基盤を作ることも可能となるだろう。反日や嫌韓の悪影響を相対化することも出来る。

●第3に、世界全体に視野を広げるとどうなるか。シンガクス大使のご発言にもあったが、米国はTPPやパリ協定から離脱。英国のEU離脱。大国が内向きになり、グローバリゼーションの負の側面に、ナショナリズムで対抗する動きが顕著になってきている。

●日韓はともに、グローバリゼーションの恩恵を受けてここまで発展してきた国。グローバリゼーションの負の側面を克服するのに、ナショナリズムによって克服しようとするのではなく、さらなるグローバリズムによって克服していくことを、世界に主張して行くことの出来る国である。経済だけでなく、社会や環境の側面も含めた、今後の持続可能な世界に向けた、国連で作られた2030アジェンダ、SDGs（Sustainable Development Goals 持続可能な開発目標）。この目標が示す理念を、率先して主導していくような、リーダーシップを取ることが出来る、アジアで二つの国でもある。

●結論。日韓関係はこれまで大いに発展してきたが、今後は、日韓関係の発展から得られる利益は、日韓両国にとどまらない。東アジア全体に、世界全体にとって果実をもたらすことが出来ると信じる。その意味では日韓関係はまだ開発途上であり、まだまだその可能性が広がっている。そのための隘路（ボトルネック）を開く鍵が、文化交流を通じた相互理解の深化にあるといえるのではないか。

（了）